

Close Up

# 地元と一体となって 秩父の魅力を発信。

SLパレオエクスプレスの運行で知られる秩父鉄道。

約120余年の時を刻んだ地方鉄道は、

秩父エリアの旅客輸送を担う象徴的な存在だ。

2017年度はSL復活から30年を迎え、

沿線住民のSLに対する誇りとともに、

周年事業を盛り上げ、次代につなげようとしている。

文◎茶木 環

撮影◎織本知之 写真提供◎秩父鉄道株式会社



## 特集：通勤も観光も—新たな輸送需要の開拓

[利用者満足度の向上へ。西武鉄道の取り組み]



秩父鉄道株式会社  
執行役員 企画部長

**坂本昌己**  
Masami SAKAMOTO

### SLパレオエクスプレス運行30周年

秩父鉄道は羽生を起点に、熊谷、寄居、長瀨、秩父、三峰口と、埼玉県北部を東西に横断する営業キロ71・7kmの路線だ。その歴史は、前身の上武鉄道が1901年、熊谷―寄居間を開業したことに始まる。以来、秩父の石灰石やセメント輸送を担い、地域の産業を支える存在として活躍する一方、JR東日本や西武鉄道、東武鉄道と接続し、旅客輸送においても発達した。

秩父鉄道の名前を全国的に有名にしたのはSL運行だ。1988年に熊谷市で開催された「さいたま博覧会」に合わせてSLパレオエクスプレスの運行が開始され、2017年度、30周年を迎えた。当初は埼玉県北部観光振興財団が車両を保有し、運転士はJR東日本から出向、秩父鉄道は運行管理を業務委託されていたが、現在は秩父鉄道の自主運行となっている。

### 秩父の観光人気を牽引

秩父鉄道の沿線は観光地に恵まれている。国の天然記念物に指定された長瀨岩畳をはじめ、秩父三社（寶登山神社・秩父神社・三峯神社）や秩父札所などを目当てに訪れる観光客は多い。SLパレオエクスプレスも、観光資源の一つとして定着している。

「都心から一番近い蒸気機関車」を謳うSLパレオエクスプレスは土休日



絵本とセットになったユニークな乗車券。

を中心に1日1往復、熊谷―三峰口間を約2時間40分かけて走行する。気軽に乗れるSLというイメージが強いだけに、乗客の中では家族連れの姿が目立つ。

「当社の特性として、予約をされた団体のお客さまのほか、当日訪れるお客さまが非常に多く、全体の7割を占める。東京都心部から比較的近いので、当日の予定や天候を見ながら、乗車を決める方が多い」と執行役員を務める坂本昌己企画部長は語る。

秩父人気と相まってSLパレオエクスプレスの乗車人員は増加の一途をたどり、近年は7万人超が乗車、運行日数も17年度には100日を超えている。

全体の年間輸送人員も、沿線住民の少子高齢化の進展で定期利用が微減しているものの、SLをはじめ秩父エリアの観光要因で定期外は微増しているという。

また、秩父鉄道は、大正年間から旅館を開設するなど観光振興に取り組み、「長瀨ラインくんだり」や「宝登山

## 特集：通勤も観光も—新たな輸送需要の開拓

【利用者満足度の向上へ。西武鉄道の取り組み】



上／秩父といえば真っ先に思い浮かぶ「長瀬ラインくんだり」。  
下／車内でも車外でも多くの住民が参加した「ちちてつマルシェ」。

ロープウェイ」など多くの観光施設や資源を有して、秩父エリアの観光を牽引してきた。

「約120年かけて、当社の先輩方が手掛けてきたことが積み重ねられ、少しずつ効果を生んでいるのではないかと、坂本部長は秩父観光の人気の理由を振り返っている。

### 他社との連携で相乗効果を出す

SLパレオエクスプレスの運行に際しては、沿線施設などと連携した車内イベントや、沿線のレストランの食事を車内で提供するランチ列車企画な

ど、リピーターを取り込む積極策を次々と打ち出している。

また、16年5月には、西武秩父駅に乗り入れを果たし、西武鉄道にとって実際に約60年ぶりの自社線でのSL復活となった。17年度も臨時SL列車として7回運行、西武鉄道とは「長瀬紅葉おさんぽきっぷ」などの企画乗車券でも連携をとっている。

また、近年増加している訪日外国人向け乗車券として、17年度より、「SEIBU 1 Day Pass + Nagatoro」など、西武鉄道・秩父鉄道指定区間乗り放題きっぷを4種類発売している。インバウンドに関してはさらに、熊谷に

キャンパスがある立正大学と産学連携して、留学生のモニターツアーなどを企画中だという。

北関東では他社でもSLを運行しており、激戦区という印象も否めないが、実際は、複数のSLに乗車できるメリットで誘客につながっているという。

「当初はSLをめぐるって他社が強力な競合相手になるのではと心配もしたが、SL周遊されるお客さまが多く、相乗効果となっている」（坂本部長）

他社との連携を密に行うことで事業を効果的に伸ばしているという。

### 地元と一体化して盛り上げる

注目すべきは沿線地域との連携だ。秩父鉄道は17年11月、「SL運行30周年記念・御花畑駅および影森駅開業100周年記念事業」として、「ちちてつマルシェ」を開催した。秩父三峰口間の駅や施設を拠点に、ハイキングやステージ演奏、地元産グルメの販売やおもてなしなど、沿線でさまざまなイベントや企画が実施された。

「当初は鉄道イベントも考えたが、秩父地域の鉄道として歳月を積み重ねてきた、その周年祝いなので、自社だけでというのではなく、地域の方々と一緒にイベントを手掛け、一緒に盛り上がっていただくことを考えた」と坂本部長は語る。浦山口駅から三峰口駅間の約3000世帯には、走行するSLパレオエクスプレスに旗を振ってもら

う。各イベントは、施設や店舗の従業員だけではなく、高校生から農家で、さまざまな人々が参加してくれたという。

「こちらから地域の方々にお願いでご協力いただくつもりだったが、逆に、いろいろなことを積極的に提案して引張ってくださった。地域の方々と一体となってイベントを成功させることができた」と坂本部長は語る。

地域の人々が秩父鉄道に気持ちを寄せるのは、SLが秩父エリアでシンボリックな存在となっているからだろう。

一方、秩父鉄道では、IC乗車券を導入していないがゆえのユニークな企画乗車券も数多く発行している。女性社員が考えた『ぼくはSLパレオエクスプレス』という絵本と乗車券のセット、落語家・林家たい平師匠による版画と秩父銘仙付き乗車券、沿線の足袋の産地・行田市にちなみ足袋型の乗車券など、柔軟な発想で誘客施策が生み出されている。

「定期外利用を伸ばすために、新しい観光資源を掘り起こしたい。来年10月には新駅のふかや花園駅も開業し、さらなる需要が見込まれる。今後他社や地元と連携を図りながら集客し、秩父の魅力をより多くの人に知っていただきたい」（坂本部長）

秩父観光ブームは一過性ではなく、秩父鉄道をはじめ地元で連携と重ねてきた努力と、現代の取り組みとが結びついた堅固なものと言えるだろう。